
お仕置きタイム

野田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お仕置きタイム

【Nコード】

N9457H

【作者名】

野田

【あらすじ】

なんかまあ、いけないお仕置きくみたいな？（笑）

1 (前書き)

続き書くには皆さんからの感想が無いとやる気が…… (笑)

「仕方なかったの！」

「ダメ、お仕置き」

俺は香織をソファに
荒く押し倒す。

「俺以外と一緒に居るなっつたろ」

香織の艶のある髪を撫でる。
ほのかなシャンプーの匂い。

「友達だつてばあ……」

頬をピンクにして
俺を見上げる香織。

やっぱり、可愛すぎ。

「友達でもだめ」

俺は香織の服を脱がしていく。

「もぉ……えっち……」

ワンピースを脱がすと

あらわになるピンクの下着。

ここまでくるともう

とまれはしない。

お仕置きの始まりだ。

俺は香織にキスしながら
胸を愛撫する。

「……ん……はぁ……」

香織の小さい声が
静かな部屋に響く。

ピンクの乳房を

舌先で舐めてみる。

「…あっ……」

香織の反応はすでに
敏感になっている。

舌と唇を使つて
乳房を集中的に
舐め続ける。

次第に香織の身体が
くねくねと動きだす。

感じている香織を見て、
俺も感じてしまう。

俺は香織のパンツを
片手で脱がして、
足を立てさせる。

M字開脚の状態だ。

胸の弄りをやめ、
手を香織のアソコに運ぶ。

もうぬるぬるしていた。

「触つて欲しい？」

香織に問うと
恥ずかしそうに
小さく頷いた。

俺は人差し指で
クリトリスに触れる、

ピクンと香織が反応する。

俺はクリトリスを
クニクニとつまんでみたり
擦ってみたり。

香織の反応が可愛すぎる。

「あ……んっ……／／／」

香織の反応が良くなった
ところでソコに
俺は指を入れた。

ゆっくりと動かしていく。

クチ…クチユ……

「あん…あっ…ん、あん……」

指の出し入れにともなって
激しさを増す香織の喘ぎ。

クチッ、クチユッ、クチッ……

「や、あん、あ…いつちゃうっ／／／」

最高潮に達する寸前、
俺は指を抜いた。

「やだあ…やめないでよお…」

潤んだ目で見つめる香織。

「お仕置きだから簡単にはイかせない」

「何でえ…」

「じゃあ、指貸すから自分で入れて」

俺は香織の密で濡れてる指を
差し出した。

「もぉ…」

「どっすんの？」

「……………//」

香織は顔を真っ赤にして
俺の指を握り自分のアソコに
持って行く。

クチ……

俺の人差し指のみを
ゆっくりと差し込んでいく。

そして香織は
ゆっくり出し入れしはじめた。

初めは息を漏らすだけだったが
次第にピストン運動は
激しさを増し、荒い水音が
響き、香織の声も荒くなる。

「やあっ、ん、ん、あんっ…あっあんっ、いくっ……／／／」

香織は俺の指を持ったまま
イってしまった。

2 (前書き)

まじ感想とか要望ください。書く気力出ません(´`)(´`)

「いつちやったね」

香織は顔を真っ赤にして
息を整える。

「だって……………」

「香織淫乱だ」

「違うもんっ！」

「本当かなあ……………」

俺は香織の身体を
また倒し、
自分のベルトを緩め
ズボンを下げる。

大きくなったモノが
ひょっこりと顔を出した。

「ほら、足広げて」

俺の指示に従い
遠慮がちに開かれる足。

俺はぐいっと

香織の足を広げ、

そのモノを近付ける。

足と一緒に開いた

香織のアソコから

クリトリスが見える。

そこに俺はモノの先を当てた。

このまま入りたい。

でもそれじゃあ

おもしろくない。

クリトリスにモノを

当てたまま、

俺は動きだす。

そそりたつモノを

香織のクリトリスに

軽く当て、上下に動く。

ピチャッ。ピチャッ……

キスのような音。

「あっ……やだっ　ん……」

「まだ入れないからな」

「何でえ…んんっ……」

「お仕置きだから」

「やだあ…入れて…？」

「だめ」

俺は腰の動きを速める。

動きに合わせるように

香織の声も荒くなる。

「んっ…あっ あんっ……」

香織の声が大きくなる。

「あんっ やあん イくっ！」

そこで俺は動きを止める。

正直俺もイきそうだった。

「やめないでよお……」

「香織、食べていい？」

「……うん」

「じゃあ、美味しく食べる」

俺は一度キッチンに行き、
イチゴジャムを取り出した。

フタを開けて、
香織の身体に
ジャムを垂らす。

「幸太？何するの？」

「ん？食べる」

「やだ、恥ずかしいじゃん……」

「声、出しちゃだめだよ？」

「え……あっ／＼／」

俺は香織のお腹に塗られた
ジャムを舌先で舐めとった。

「声だすな。お仕置きなんだから」

「だって……っ……っ」

次に脇腹、首筋……。
香織は声を出さないように
息を漏らす。

「おいし」

「声でちやうよ……」

「だめ。我慢してるよ」可愛い」

「もう……」

「じゃあ、はい」

俺はジャムのビンを
香織に手渡す。

「……え？」

「食べて欲しいところに塗って」

「えっ、やだあっ／＼／」

「許してあげないよ？」

「でもっ……」

「俺のこと嫌い？」

「……………わかったあ」

香織はゆっくりと
ジャムを手につけ、
潤んだ目で俺を見る。

「どこ食べて欲しい？」

「……………おっぱい？／＼／」

「もっと食べて欲しいところ有るんだろ？」

「……………もおっ！」

「はやく」

香織はジャムの付いた手を
アソコに運んだ。

「見ないでよお」

「やだ、見る」

ペチャ……………

香織はジャムを
アソコにたっぷり
付けた。

「やっぱ淫乱だな」

「違うっ！だって……」

「良いよ。淫乱な香織好きだし」

「あたしも幸太好きっ」

「じゃあいただきます」

俺は香織の

ジヤムのついたアソコに
舌を這わせた。

「あっ……」

「声、だしちゃだめ」

「……っ……はぁ」

「香織おいしい、イチゴだ」

俺は舌の動きを速め、
隅々まで舐めとる。

香織は今にも
声を出しそうだ。

クリトリスを吸ってみる。

「やあっ／＼／」

「声出した。お仕置きだね」

そして一気に俺は

3本の指を挿入した。

「あんっ 幸太あっ……」

3本の指を中で

バラバラに動かす。

香織の好きな場所は
もう知ってる。

その香織の一番
感じる場所を集中的に
指で攻める。

「あっ、んっ、あん
」

「俺のこと好き？」

「あんっ 好きいつ……」

「他の男と遊ばない？」

「んんっ、幸太ただだよっ
」

「じゃあイかしてあげる」

指の動きを激しくする。

「あっあっあんっ幸太あっ」

「香織可愛い」

「やあっ　イクうっ／／／／／」

香織から指を抜くと
密が溢れてきた。

「香織、イったね」

「も、言わないでえ」

「ズルいな、香織だけ」

「じゃあ幸太もイかせる！」

「じゃあ舐めて」

「いいよ　おっきい…」

「香織が可愛いから大きいの」

「もう／／舐めるよっ」

香織が俺のモノをくわえる。
慣れた手つきで
くわえたまま上下に
頭を動かす。

丁寧に舌先、唇を使って
俺のモノを可愛がる。

時折当たる歯も
心地いい。

「はあ、はあ 香織…上手い」

「幸太…好きい……」

4 (前書き)

何か微妙なラストですが
まあ許してください。
あんまエロくないかも。

香織の動きが
速くなる。

「…はぁっ 香織ヤバイ…」

香織は動きをさらに速める。

「ヤバイ、イクっ…」

俺は香織の口の中に
精子達を吐き出した。

「香織、飲め」

「んんっ」

香織は涙目にな
りながらも飲み込む。

「はぁ 飲んだよ？」

「おりこうだな、香織」

香織にキスする。

「ねえ、」
「褒美は？」

「何が欲しいの？」

「…幸太が欲しい」

「わかった」

そういつて俺は
ああ向けになる。

「おいで、香織」

「…うんっ／＼」

ゆっくりと香織は
俺の上に乗る、
俺のモノを
自分の中に入れた。

「はあっ…」

「香織、自分で動きな？」

香織が俺の上で
動き始める。

「あっ、あ んっ…」

動きに合わせて
香織の喘ぎ声。

次第に動きは
激しくなり、
喘ぎ声も高くなる。

パンツパンツパンツ…

肌と肌がぶつかり合う
音と水音が部屋に響く。

「あっ、あぁっ、んっ、あんっ」

香織の感じる顔が
可愛いくて俺は
興奮してしまう。

「やっんっ…あぁっん イくっ！」

「俺もっ…」

「あぁっ……!!」

俺と香織は同時にいった。

ド。ド。ド。ド。ド。

俺は香織の中に出す。

「幸太あ 中だめだよ……」

「ガキ出来たらいいじゃん」

「……そうだけど」

「何？迷惑？」

「違うよおっ！嬉しいの！」

「ん、じゃあこれでお仕置きは終わり」

「ええっ 終わりなの？」

「お仕置きは終わり。だから今からは仲良しエッチしよ？」

「うんっ」

「優しいエッチ好きでしょ？」

「好きっ！怖いエッチも…嫌いじゃないけど……／／」

「じゃあ優しくするな？」

「うんっ」

「ベッド行こ。ソファーじゃ狭い」

「うんー！」

俺は香織の手を引いて

ベッドに移動した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9457h/>

お仕置きタイム

2010年10月9日22時54分発行